

## 医療界もコロナ変革の時代

西区・甲北支部  
(整形外科米盛草牟田クリニック) 米盛 學



昨年は年明けから年末まで「新型コロナウイルス」に世界中が振り回された年だった。米寿を迎えた身にもこんな経験は初めてだった。まさに世の中がひっくり変わったような思いだ。このコロナ騒動によってこれまでの生活が一変、新しい生活様式が求められそうで、国民の生活はもちろん、医療界も変わらざるを得なくなった。

この「新型コロナ」は、対応を一步間違うと時の政権さえもひっくり返すほどの影響力があり、日本では「アベノマスク」など国民に不評の政策でつまづいてしまっ、ついには体調まで崩して政権を降りてしまった安倍晋三前首相。一方米国では「新型コロナは風邪みたいなものだ」などと軽視し続けたトランプ米大統領も選挙で痛いしっぺ返しを受けて、その座を引きずりおろされた。この様にコロナ禍と共に、日米国政指導者が替わったのは単なる偶然であろうか。

### 疫病で社会変化

感染症について世界の歴史を辿ってみれば、様々な感染症(疫病)がそれぞれ流行しており、その時々で社会も大きく変化している。なかでもペスト(中世では黒死病と言われた)が有名だ。歴史学者などによるとヨーロッパ

ではペスト流行の14世紀には当時の人口の3分の1にあたる3,500万人が死亡したという。まさにそのときには人類生存の危機であっただろう。この人類の危機を乗り越えた後に、大きな社会の変化がもたらされている。と言うより激減した人口で生きていくためには変わらざるを得なかったのだろう。それまでの封建社会では立ちいなくなり、新しい中央集権社会が生まれ、それに伴って新しい文化も生まれてきた。つまり疫病が世の中をダイナミックに変革してきたことになると思われる。

ペスト以外に15世紀には「梅毒」、16~18世紀には「天然痘」、19世紀には「結核」、20世紀には「インフルエンザ」- ということに様々な疫病があった。インカ帝国やアステカ文明は征服者のスペイン人が持ち込んだ「天然痘」で滅亡してしまったとされている。

それらの視点で見ると、今回の「新型コロナ」も、私たちのこれからの生き方に何らかの変化をもたらすことになるだろう。政府も新型コロナを機に「新しい生活様式を」と国民に呼びかけている。

### オンライン診療

それにしても「新型コロナ」出現で、世の中には多くのカタカナ言葉が生まれ語られるようになった。「ステイ・ホーム」「ソーシャル・ディスタンス」「テレワーク」「シャットダウン」「パンデミック」「オンライン授業」「オンライン診療」「デジタルヘルス」「コロナ倒産」- さらには「GoToトラベル」「GoToイート」etc, 頭の中がこんがらかるようなカタカナ文字が氾濫した。

「ステイ・ホーム」など犬ではあるまいし、人間に対して「家にじっとしていなさいよ」と声高に言われるとだんだん気分が悪くなる。

それらの中で気になる言葉があった。「オンライン診療」である。新型コロナウイルスの陽性患者が増え続けることで、対応を任されている医療機関が機能不全に陥ってしまう。又患者が病院での新型コロナ感染を恐れて、医療機関への受診を控えることなどで、医療機関そのものが倒産する。つまり「医療崩壊」を招いてしまうと言うわけだ。

まさに然りで、鹿児島市内病・医院の外来・入院患者数が減少しており、医業経営の危機が懸念されているようだ。

このような判断を予測した政府は、新型コロナ対策で患者と対面しないでインターネット等を使った初診時での「オンライン診療」を時限的、特別的な対応として認めるようになった。もともと厚生労働省は「オンライン診療」についてはこれまで「初診は対面」を原則としていた。それが昨年4月から特例として電話やタブレット端末などを使った「オンライン診療」を初診から認めているようだ。とはいえ今のところ「オンライン診療」は期限付きで新型コロナが収束するまでとしながらも、今少し明解でない。

しかし、菅 義偉首相の登場で規制改革の一環として、オンライン診療の「恒久化」が打ち出された。又経済財政諮問会議も「特例措置の恒久化」を提言するなど、あれよあれよという間に「オンライン診療」が菅政権の看板政策になっているのではないかと思われる。

中川俊男日医会長は「オンライン診療」について、「初診からのオンライン診療は有事における緊急の対応」「医療機関へのアクセスが制限されている場合の補完的なもの」 - と記者会見で表明しているように、まだ医師会としての見解は定かではない。

本格的な「オンライン診療」はまだ紆余曲折がありそうだが、いまの政府の積極的な動きをみると新しい医療体制が生まれる気配を感じる。

## 変革の時代

今の世の中はインターネットなどの通信とコンピューターを融合した情報技術（IT）が生活の隅々まで入り込んでいる。最近では人工知能（AI）とも言われるシステムも誕生して、限りなく人間に近づいてきているとか、或いは逆に遠ざかっているという人もいる。

頭脳戦の塊の様な将棋やチェスでは人間がAIに負かされる時代となってきている。我々、医療界は最終的にそれぞれのドクターの判断が必要なのは言うまでもないが、今では「AI」なしの診療が難しくなっているのも事実である。CT、MRI、AED（自動体外式除細動器）、さらに今回の新型コロナ治療で有名になったエクモ（体外式膜型人工肺） - など、医療機器はまさにAIの塊である。

昨年9月に誕生した菅政権でもいち早く、デジタル化を進めるために新たに「デジタル庁」を作るとピッチを速めている。特に新型コロナ対策で打ち出された施策の国民への周知・給付が遅れたことを踏まえ、様々な施策の迅速化や教育界、医療界など公的サービスのデジタル化を最優先課題に挙げている。その延長線上に「オンライン診療」も当然、含まれていることだろう。

我々医療界にも従来の医療のあり方とは異なる体制作りが求められている気がする。これまで人類は多くの感染症を克服して、新しい世界を作り出してきた。医療も飛躍的に進歩してきているなかで、どんな医療体制を作り出すのか、いま考えなければならない重要な時を迎えているのではあるまいか。